

日本語感

麻野、いや朝の 2 時を回ったところでこんなことを書きたいと、ノートパソコンをまた起動させた。

「おくりびと」と「つみきのいえ」のアカデミーショーの受賞の報告やインタビューを YouTube で見てさっき初めて「ええっ、そうなんかあ。。。」。コスタリカ在住でいろいろな面で世界との隔たり、特に故郷の日本とはそれだけある。

この映画とアニメーションはまだ観ていないが、そっちょくな感想は「英語が下手な日本人に日本語を誇りに思う」である。

僕が日本人だからこう言うのではなく、僕が日本語というとてつもなくとび抜けた言語、ユニークというよりその「変」な言語を知っているから。。。否、ほんのわずかながら知り始めているからかであろう。実に多くの日本人の皆さんには「英語が下手な日本人に日本語を誇りに思う」と聞いてもパツとしないと僕は予想する。

今のところ人生の半分以上を外国で過ごし、国語の勉強は中学校の 3 年まで。。。なんとも恥ずかしいことだが、日本人なのに日本語の不十分な日本人と呼んでほしい。そんなこんなで当たり前でない自分だから気付いたことは、英語や外国語をしゃべれなくても恥と思っ
てはいけない。日本語だけで十分、いや十二分である。これが意味することは「日本語はすばらしい」の一言につきる。細かく説明していきたいが、それにはかなりの時間と労力が必要で、この時間では不可能だ。

レベルという言い方はきつい（失礼にあたる）かもしれないが、あえて英語のレベルに合わせて英語でしゃべる、で書く、で読むことは悪いことではない。簡単に言うと、「日本語でしゃべっても、なぜ通じないのか?」「英語だとなぜ通じるのか?」である。

日本語がもたらす傾向として、日本の全てがそれに当てはまる。まとめてしまうが、日本語が日本人をつくり、文化や伝統をつくり、繊細さや想像性をつくり、わびさび、感情や精神、もちろん日本人独特の発想や考え方も生んでいる。日本食文化だけを見つめてもこれら全てが修まっている。

とにかく、小さい子供たちの日本語教育、国語の勉強を第一に、英語や外国語は大学生や大人になってからでも十分でき、必要性があればそれからでもそこそこ身につくものである。しかし日本語の場合そう簡単にはいかないのが常である。

英語は世界共通語と言っても過言ではない時代、そんなごく（語句）ありふれた言語を知っていてもさほど自慢まできまい。

続きはまた。

サンホセ、コスタリカ 2009年5月12日

探検昆虫学者

西田 賢司